わがまちで最初の開業医「富田さん」が閉院



明治四〇年（一九〇七年）、先代院長の富田優氏が利別村の村医として着任、大正七年に開業して以来、『富田さん』と親しまれ親子二代百三年にわたり、地域住民の生命を預かる医師として町民の健康を守ってきた富田医院が、3月31日をもって閉院しその永い歴史に幕を下ろしました。

ゆったりと柱時計の鐘の音が響くご自宅のリビングで「最後のひと月はさすがに忙しかったから、今はホッとしていますよ。」と静かに微笑む富田守圀先生に、永年にわたる診療の歩みを少しだけ振り返っていただきました。

軍医学校を出てすぐに診療を手伝いはじめた当時のことや、救急当番をしていた時のことなど、たくさんの思い出の中でも先生が最も思い出されるのは、往診の移動が大変だったこと。道路が今のように整備されていない時代、汽車に自転車を積んで花石へ往診し、帰りは自転車を押して熊笹が背丈以上に生い茂っていた花石峠を歩いたり、奥沢まで馬そりで往復8時間以上かかったり、美利河への往診で駅に降りたが患者宅まで道が無く、線路を歩いて行ったこともあり、「高所恐怖症だから鉄橋では足がすくみました。」と当時を思い返して愉快そうに話してくれました。

すっかり片付けられた診療所へ移動して、更に先生のお話は進みます。「昔は国も町も人々も貧しかった。保険も無い時代で医者は奉仕のようなもの。それでも町の人は自分を頼りにしてくれたので、いい時代に医者をやらせてもらった。」と、眼を細める先生。開業当時から使用されていた診療室の机や待合室の畳には、富田医院が町民の皆さんと共に歩んできた時間が刻まれていました。

これまで仕事一筋で、気の休まる暇も無かった先生は、今後は奥さんと二人で普通にゆっくりと過ごしたい、と静かに話してくれました。

















1 二代目院長の富田守圀氏
2 現在地に富田医院を新築して開業される。
3 先代院長から愛用している机
4 先代院長の富田優氏
5 富田医院の院内（受付窓口、待合室、玄関、診察室入口扉）